

Co だより

群馬県立太田高等特別支援学校

コーディネート係発行

第50号 平成31年 4月 5日

学級開き、学級づくりのポイント

1. 3・7・30の法則

小学校の実践から生まれたもので、本校の実態に合わない部分もあるが、指針や目安としては役立つ。大事なことは、まず必要なものはルールであるということである。ただし、それだけでは不十分で、徐々に作っていくか最初からそこを基盤に作っていくかの違いはあるものの、教師と子どもたちの親和的な関係が必要だということである。

安心感をベースにして、ルールやルーティンを教え、それらを確立しながら教師との親和的関係を育てることが大原則である。



①最初の3日間「3の法則」

出会ってから数日は、生徒は様子見をしている。脱皮したての甲殻類のように認知や行動様式が柔らかい段階であるので、クラスの枠組みを示す絶好の機会である。

また、「今度の先生は楽しそうだ」「今度の先生は面白そうだ」という印象を与え、子どもたちとの心理的距離を縮める。

②最初の1週間「7の法則」

仕組みづくりの1週間で、朝学校にきてから帰るまでの学校（学級）の流れを決めてしまう期間なので、生活ルールやルーティンなどを決める大事な期間である。

③最初の1ヶ月「30の法則」

繰り返しの1ヶ月とされ、決めたルールを定着させる期間である。ルール定着の問題は、ほとんどが教師の自己管理の問題で、教師の見取りや確認が疎かになることから定着が疎かになると心得た方がよい。定着を焦ると、つい叱りがちになるが、望ましい姿、できている姿、努力している姿に注目してそれを認める形で定着を図る。もし、ルールを守っていない場面を見かけたら、「思い出してみよう」「こういうときは、どうするのだったかな」と気付かせるようにする。



2. 2つの学級経営スタイル～安定するクラス～

指導重視型

教師と児童生徒の上下関係を重視し、ルールの徹底を図る必要性を主張するタイプのリーダーシップのこと。整然としていてよくまとまっていて、生徒指導上の問題があまり起こらない。

まず、「時間を守ること」「整理整頓をすること」「人を傷つけないこと」など、クラスにとって大切な基本的ルールを指導する。統率者としての振る舞いを重視し、行動する。しかし、それだけでなく、クラスとしての枠組み作りを優先しながら、徐々に子どもたちと親和的な関係を構築していく。縦の関係から、横の関係を作っていくのである。

児童生徒尊重型

児童生徒の思いを優先し、教師と児童生徒の間の上下関係を最小化するリーダーシップのこと。ときどきトラブルは起こるが、大きくならないうちに解決し、子どもたちがわいわいと賑やかに過ごす。

子どもたちとの親和的な関係を大事にするように振る舞う。「大事なことはみんなで決めよう」と促し、生活のルールを決めたり当番を決めたりしながら、子どもの自治をサポートしていく。

緩やかにやっているように見えても、とても高い力量が必要である。子どもたちが話し合いで物事を決めるということは、様々なルールをしつけることが求められる。それをしなかったら、話し合いが成立しない。成立したとしても、非民主的な話し合いによって不満が出て、人間関係に亀裂が生じ、初期段階から大きなリスクを背負うことになる。指導尊重型よりも高い指導力や教師の自己調整力が必要となる。

3. 初期段階の大原則

ルールが大事だからといって、「鉄は熱いうちに打て」のごとく初期段階でどんどんとルールを決めていけばいいかということそうではない。規則を守るという態度を形成するのは安心感である。安心感は、学習意欲、進路意識、特別活動への態度、教師との関係にも肯定的な影響を及ぼす。

ルールを指導する前提としての安心感の保証が必要である。

安心感の足りないところで、ルールだけ指導しても、場合によっては、教師からの要求のように映ってしまい、不安感を高めるかも知れない。そうした意味で改めて見ると、最初の3日間の意味は見逃せない。「楽しそうだ」「面白そうだ」という教師に対する子どもたちの認知は、安心感につながる感覚だと捉えることができる。

一方で、特に1年生の教師たちが丁寧に学校の過ごし方を伝えるのも安心感の創出に寄与している。

<参考文献>

授業力&学級経営力（明治図書）2019年4月号 NO.109

「最初の3日,1週間,1ヶ月で押さえるべき,学級づくりのポイント」上越教育大学 赤坂真二教授